

件 名	栃木県有形文化財の指定について
提案理由等	<p>栃木県文化財保護審議会から指定することが適である旨の答申のあった文化財について、栃木県指定有形文化財に指定するものである。</p>

栃木県有形文化財の指定について（案）

令和 4 (2022) 年 7 月 29 日付けをもって、栃木県文化財保護審議会から指定が適である旨の答申のあった下記の文化財について、栃木県文化財保護条例（昭和 38 年栃木県条例第 20 号）第 4 条第 1 項の規定により、栃木県指定有形文化財に指定する。

記

種 別	有形文化財（考古資料）
名 称	くるま橋遺跡出土銅造阿弥陀如来坐像 <small>ばしいせきしゅつどうぞうあみだにらいざぞう</small>
所在地等	下野市紫 474 栃木県埋蔵文化財センター
所有者	栃木県

令和 4 (2022) 年 9 月 6 日

栃木県教育委員会

令和4(2022)年7月29日

栃木県教育委員会 様

栃木県文化財保護審議会

栃木県指定有形文化財の指定について（答申）

令和3(2020)年7月6日をもって諮問を受けた有形文化財の指定の適否について、当審議会は慎重に審議した結果下記のとおり答申します。

記

種 別	有形文化財（考古資料）
名 称	くるま橋遺跡出土銅造阿弥陀如来坐像
所 在 地 等	下野市紫 474 栃木県埋蔵文化財センター
所 有 者	栃木県
指定等の適否	適（理由は別紙調書参照）

調 書	
種 別	有形文化財（考古資料）
名称及び員数	くるま橋 ^{ばし} 遺跡出土銅造阿弥陀如来坐像 1 軀
所在の場所	下野市紫 474 栃木県埋蔵文化財センター
所有者の氏名又は名称及び住所	栃木県 宇都宮市埴田 1-1-20
寸法及び形式等	^{ぞうこう} 像高8.9 cm ^{はっさいこう} 髮際高7.1 cm ^{いただき} 頂一顎 ^{あご} 3.0cm ^{めんちよう} 面長1.5cm ^{めんはば} 面幅1.7 cm ^{みみはり} 耳張1.9 cm ^{めんおく} 面奥2.2 cm ^{むねおく} 胸奥2.1 cm ^{はらおく} 腹奥2.3 cm ^{ひじはり} 肘張4.2 cm ^{ひざはり} 膝張5.8 cm ^{ひざおく} 膝奥4.0 cm ^{ひざだか} 膝高(右)1.0 cm(左)1.1 cm
年代又は時代	平安時代前期
指定の適否	<input checked="" type="radio"/> 適 <input type="radio"/> 不適
現 況 及 び 所 見	
<p>本像は、真岡市石島に所在するくるま橋^{ばし}遺跡から出土した鑄銅製の阿弥陀如来坐像である。</p> <p>くるま橋遺跡は、南流する五行川右岸の真岡台地上に位置する、古墳時代から近世にかけての遺跡である。標高は、約 59～61m で、台地東側に広がる低地との比高は約 10m である。</p> <p>平成 29（2017）年度に行われた県道建設に伴う発掘調査では、7 世紀中葉から 10 世紀にかけての竪穴住居跡 62 軒など、多数の遺構が確認され、継続的に集落が営まれていたことが明らかとなった。これらは、最も標高が高い十二所^{じゅうにしよ}神社の周辺に集中しており、本像が出土した竪穴住居跡（SI-1）もここに位置する。</p> <p>SI-1 は、長軸 5.46m、短軸 4.49m の平面長方形で、遺構確認面から床面までの深さは最大 0.47 m である。中央部南西寄りに長軸 0.46m、短軸 0.32m の炉跡を確認したほか、硬化赤変した部分が 2 箇所認められる。柱穴、カマドはない。</p> <p>本住居跡は、ゴボウの作付けによる攪乱が著しいが、原位置を保っていた遺物として、本像のほか、土師器片 11 点、鉄釘片 1 点が報告されている。本像は、竪穴住居跡の南東隅付近の人為的な埋め戻し土と思われる覆土最上層（SI-1 実測図第 1 層）から仰向けの状態で出土した。このことから本像は、住居廃絶後の竪穴内に安置（または埋納）されたものと推定される。また、出土した土器の年代観から本住居跡は 9 世紀末葉から 10 世紀代の所産と考えられる。</p>	

なお、栃木県内では9世紀代を中心に一般集落への仏教の波及を示す発掘調査資料が増加している。くるま橋遺跡周辺においても、仏堂と推定される掘立柱建物跡の確認（真岡市中根北遺跡、市貝町寺平遺跡、宇都宮市辻の内遺跡ほか）や寺院名が記された墨書土器の出土（真岡市西物井遺跡、同市鶴田A遺跡、壬生町東林北遺跡ほか）等が、各地の集落跡で報告されている。

本像は、全身を一鑄^{いっちゅう}で造った像高8.9cmの小像である。おそらく蠟型による鑄造であろう。鑄銅像は飛鳥時代から奈良時代に盛んに造られた。平安時代には木彫像にくらべてその数が減るが、国内各地にある程度の数の遺品が残る。背面と地付き部以外の表面は現状では金色を呈するが、通常の鍍金とは状態がやや異なり、どのような技法によったのか、またこれが当初の仕上げかどうかはともに未詳であり、今後の研究に委ねたい。

頭部は肉髻^{にくけい}と螺髪^{らうはつ}の境を明瞭にあらわさない平安時代前期の仏像に時々見られる形を示し、阿弥陀如来^{あだつた}の定印^{じょういん}を結び、背を反らして足を強く組んで座る。衲衣^{のうえ}は両肩を覆う通肩^{つうけん}にあらわされる。この形は平安時代の如来坐像としてはやや珍しい。衣文^{えもん}は細かく丁寧^{ていねい}に表現され、像全体の均斉のとれた姿と相まって小像とは思えない気宇の大きさを示している。当初は光背及び台座が付属していたと考えられるが、現在は失われている。なお、像は後ろに著しく傾いた形で座るが、像底にはとくに後世に修整された痕跡はない。当初からこの姿だったと思われるが、このような姿勢の像はほかにほとんど知られない。

これらの技法、表現の特色から、本像は平安時代の中でも9世紀末から10世紀前半を中心とする時期の造像である可能性が高い。このことはSI-1出土土器の年代観とも矛盾しない。

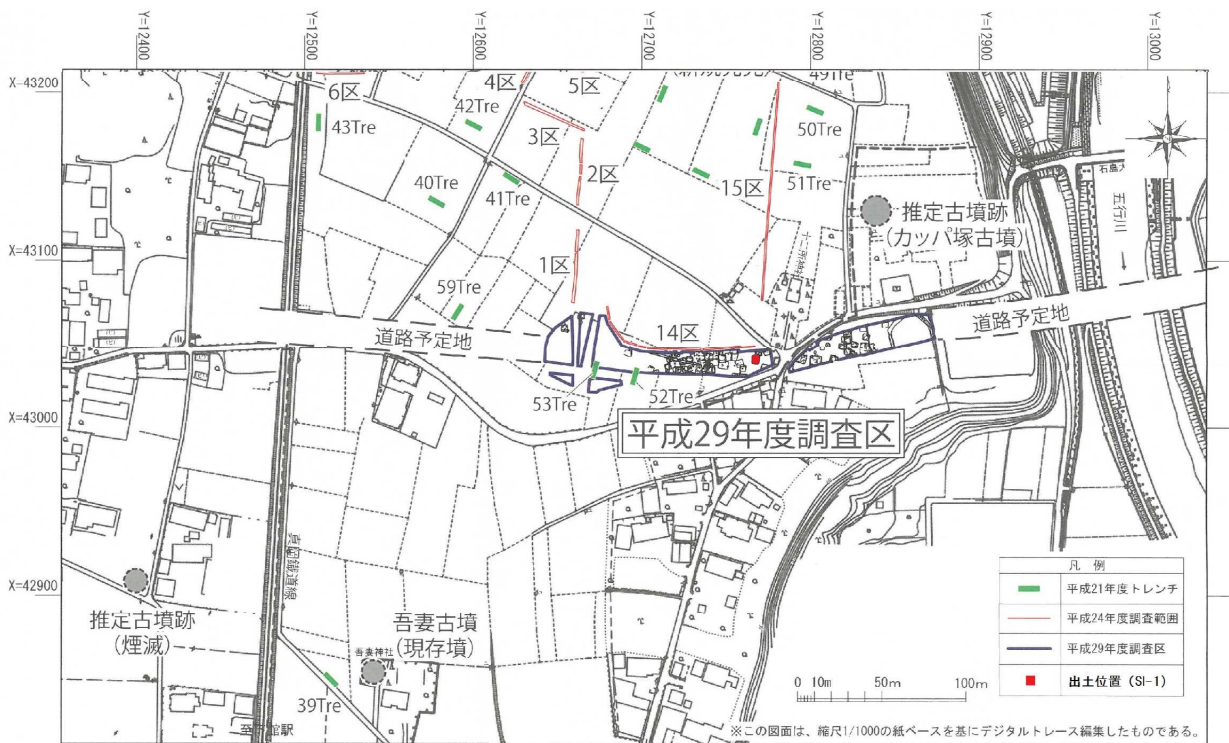
小像であることから、個人の念持仏だった可能性なども推測されるが、当初の安置場所などは判然としない。

本像は、その作風、表現が優れ、また極めて高い技術で造られた平安時代の鑄銅像の優品であり、古代の当地方における仏教信仰の様子を知る上でも貴重な資料であることから、栃木県指定有形文化財に指定すべきものとする。

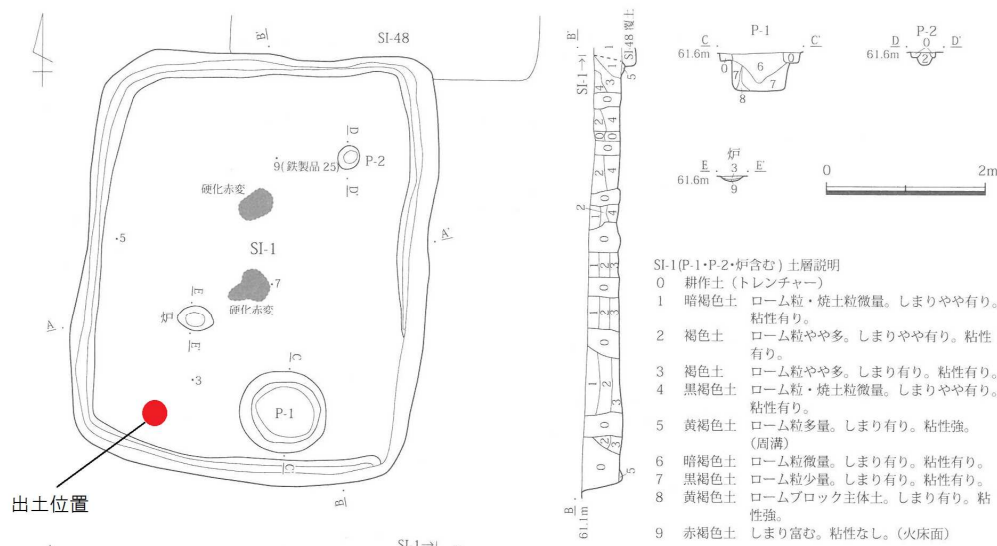
調査年月日	令和3(2021)年10月14日
調査委員氏名	新井敦史 伊藤信二 鐘江宏之 副島弘道 高山慶子 梁木誠 (五十音順)



くるま橋遺跡位置図



平成29年度くるま橋遺跡発掘調査区



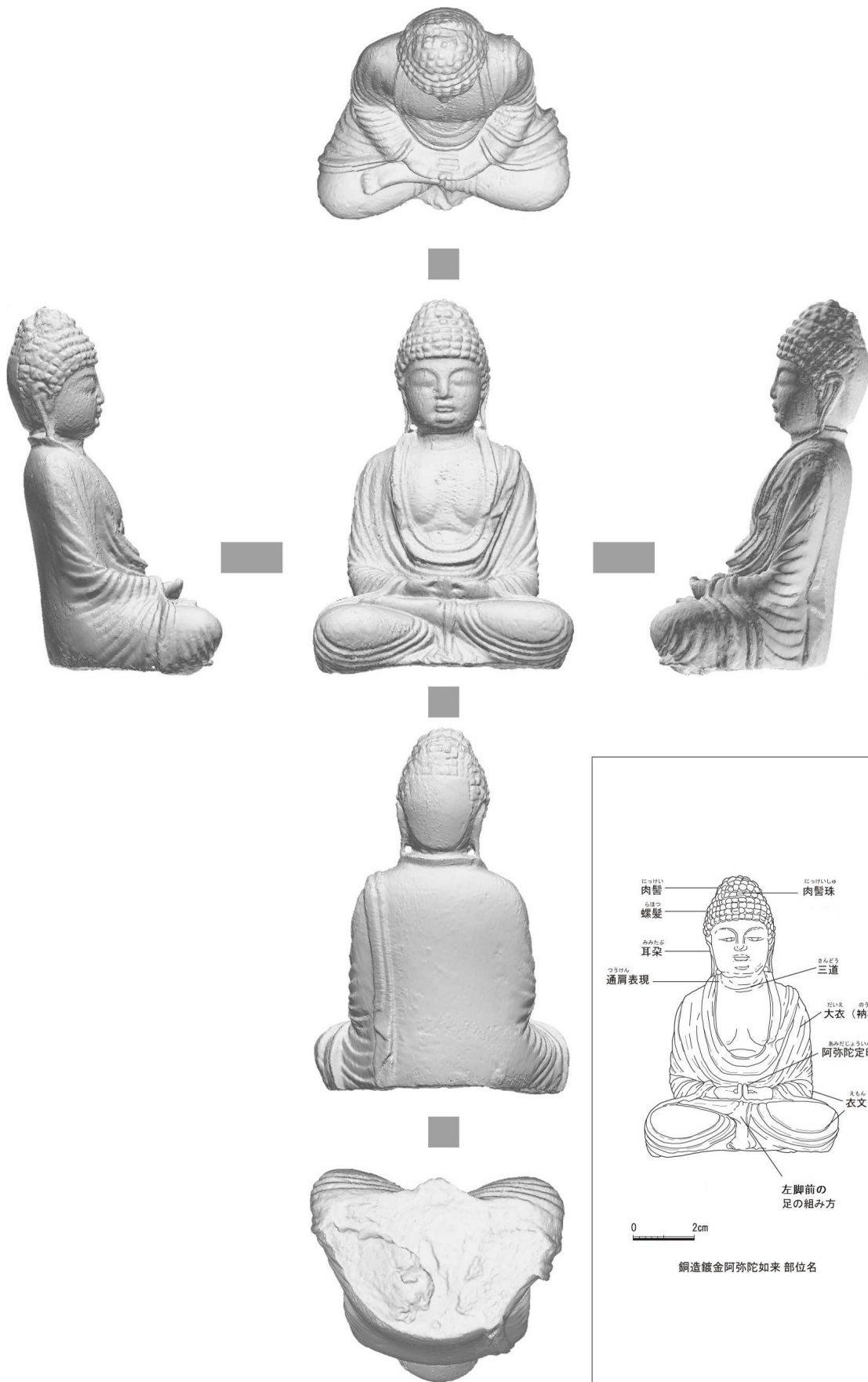
- SI-1 (P-1・P-2・炉含む) 土層説明
- 0 耕作土 (トレンチャー)
 - 1 暗褐色土 ローム粒・焼土粒微量。しまりやや有り。粘性有り。
 - 2 褐色土 ローム粒やや多。しまりやや有り。粘性有り。
 - 3 褐色土 ローム粒やや多。しまり有り。粘性有り。
 - 4 黒褐色土 ローム粒・焼土粒微量。しまりやや有り。粘性有り。
 - 5 黄褐色土 ローム粒多量。しまり有り。粘性強。(周溝)
 - 6 暗褐色土 ローム粒微量。しまり有り。粘性有り。
 - 7 黒褐色土 ローム粒少量。しまり有り。粘性有り。
 - 8 黄褐色土 ロームブロック主体土。しまり有り。粘性強。
 - 9 赤褐色土 しまり富む。粘性なし。(火床面)

SI-1実測図



※実物は両側面写真よりもさらに後方に傾いて座っている。

銅造阿弥陀如来坐像 (S=2/3)



※実物は両側面写真よりもさらに後方に傾いて座っている。



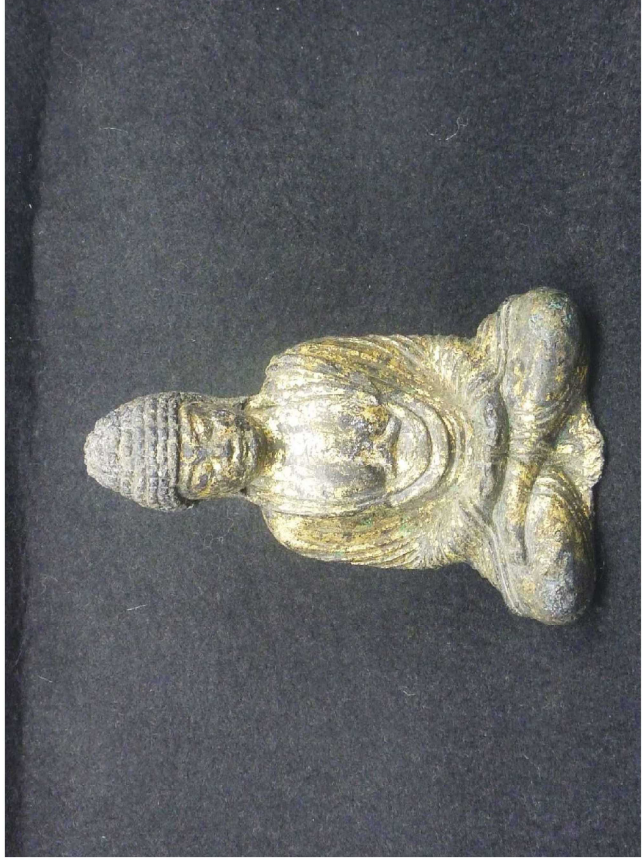
くるま橋遺跡 調査区遠景(北西上空から 赤丸＝出土位置)



くるま橋遺跡 竪穴住居跡SI-1(赤丸＝出土位置)



銅造阿弥陀如来坐像出土状況(北から)



くるま橋遺跡出土銅造阿弥陀如来坐像